

普賢菩薩と性空上人

——附リお竹大日如來の由來——

沼波守

ふげんともならう四五日前に買ひ

「柳多留」初編にある柳句で、普賢菩薩が遊女と化してをられたといふ話が、如何に流布してゐたかの一證である。この話は「古事談」の第三、「僧行」篇と、「十訓抄」第三、「不可悔入倫事」の篇とに出て居る。兩書の文章は異つて居るが、内容は殆んど同一である。その概略は、

書寫山の開山性空人が生身の普賢菩薩を拜みたいと祈請を凝してゐたら、神崎の遊女の長者を見よとの夢告があつたので、長者の家に行つてみると、折節京よりの客が來て居て遊宴亂舞の程で、長者は

周防むろづみの中なるみたらひに、風はふかねども、さら波たつ。

と唄つてゐる。上人眼を閉ぢて合掌して居ると、その長者は忽ち普賢菩薩の尊貌を現じ、六牙の白象に乗り、眉間から光を放つて、道俗の人を照らし微妙の音聲を發して、

實相無漏の大海に、五塵六慾の風はふかねども、隨緣眞如の波の立たぬ時なし。

と仰せられてゐる。上人感激に堪へ難く、眼を開いて見ると、もとの女人の姿となつて、「周防むろづみの」と唄つて居る。眼を閉ぢると、又菩薩の貌となつて法文を演べて居られる。かやうな事が度々であつたので、上人は恭敬禮拜して、感涙に咽びながら歸つた。すると長者は俄に座を立て、間道から上人の傍に来て、此の事人に口外する勿れと云ひ畢つて、忽然と死んでしまつた。時に靈香虛空に充滿して甚だ香しかつた。といふのである。

「十訓抄」は著者については説があるが、成立は序に建長四年（一二五二）とある。「古事談」は源顯兼の作と云はれ、建曆（一二二二）以後、建保三年（一二一五）以前に成立したものであらうと云はれてゐる。つまり「古事談」の方が「十訓抄」よりは三十余年以前に出来てゐるから、「十訓抄」は「古事談」を資料としたのであらう。尤も兩書の話が同一の原典から採られたのかも知れないが、さういふ書を私は知らない。そこで兩書の文を讀み較べてみると、「古事談」の漢文調の文を、「十訓抄」で和らげたとみて大過はないであらうと思はれる。ところで右の兩書のほかに、「撰集抄」の六、「性空上人事付室遊女」といふ章にも、大同小異の話を載せてゐる。それは、

有夢告云、欲奉見生身普賢者、可見神崎遊女之長者云々

古事談

或夜轉經につかれて、經をにぎりながら、脇息によりかかりて、しばしまどろみ給へる夢に、生身の普賢を見奉らんと思はゞ、神崎の遊女の長者を見るべき由、示すとみて夢さめぬ。

十訓抄

とあるのに、この「撰集抄」では、

七日祈念していまそかりけるに、七日の曉のうつゝに、天童託して曰く、室の遊女が長者を拜め。それこそ實の普賢なりと示して失給ひぬ。

撰集抄

となつてゐる。「古事談」等では、京からきた客の遊宴亂舞の様を、上人が傍から見てゐる事になつてゐるが、これでは上人が同宿の僧五人と共に客であつて、

長者酌取り聖人に酒をすゝめ奉れり。しひ申すとて舞を舞ふ。「周防みたらしの澤邊に、風の音づれて」とかずふれば、井びゐたる遊女ども、同聲して、「さゝら波たつ。やれこさつ。」とうけ拍しける。

撰集抄

となつてゐて、歌詞も少し異つてゐる。普賢と現じての法文の句も、「古事談」等のは稍異つて、

法性無漏の大海には、普賢恒順の月、光ほがらかなり。

撰集抄

となつてゐる。また場所も「古事談」や「十訓抄」では神崎であつたのが、室となつてゐる。そして「撰集抄」には

さて又此遊女のやがてはかなく成り給へる事、いかなるやうの有るにや。諒まさの顯れぬとて去りいまそかりけるやらん。また聖人に拜まれ給ひぬれば、是やのぞみにていまそかりけん。此言は拾遺抄に載せて侍る。この見すごしがたさに書きのせぬるに侍り。

との所見を附記してゐる。

この「撰集抄」は西行の作と云はれ、壽永二年（一一八二）の序もあるが、故藤岡作太郎博士の考證の如く、

後世無學な人の西行に託しての僞作であるとすれば、その成立も西行の歿した建久元年（一一九〇）以後であらうと推定されてゐるだけであるので、「古事談」と「撰集抄」との成立の前後は簡單には定められない。「撰集抄」は後人の僞作ではあるが、實際に西行自身の書いておいた部分もあるとすれば、そしてこの普賢菩薩の話は西行の書いておいたものとみれば、序に壽永二年（一一八二）とあるから、「古事談」よりも三十年ほど前になるから、この方が古いといふ事になるけれども、この話の條が西行の自記かどうか問題であるから、室の遊女といふ傳の方が、神崎の遊女といふのより古い傳へであるとも定められない。たゞこゝに引用した「撰集抄」の文中の「拾遺抄」がわかれば、「撰集抄」の原據を知る事も出来るのであるが、残念な事に、無學な私には、遂にこの「拾遺抄」といふ書を知る事が出来なかつた。しかしこの「撰集抄」「古事談」「十訓抄」の三書の成立が、十二世紀末から十三世紀の中頃までで、あまり大きな年數の差がないといふ事は、この話が十二世紀頃に出來たのであらうといふ事を推測させる。そしてそれは性空上人が寛弘四年（一〇〇七）寂といふ事と睨み合せて、本當の話ならばとにかく、架空の話とすれば、さうした話の生まれるには、いかにも適當な年代ではないかと思はれる。

石橋倚寶氏の「十訓抄詳解」のこの條の註の中に、

「撰集抄」には室といひたれども、「江談抄」には同話に付て神崎と見えたり。

とある。ところが活字本の群書類従所收の「江談抄」には、この話は見えてゐない。もし「江談抄」に出て居るとすれば、「江談抄」は、長治から嘉承（一一〇四—一一〇七）の頃の成立だと云はれてゐるから、「拾遺抄」がさきか、「江談抄」がさきかといふ問題にもなり、この話の最初に見える文獻の年代もずつと古くなるが、前述の

やうなわけで、この點を明らかにし得ないのは残念である。ところで性空上人の事は、「本朝法華驗記」(成立一〇四〇—一〇四四)の中卷の四十五話、「今昔物語」(一〇七七の頃成立か)卷十二、「古今著聞集」(成立建長六年、一二五四)卷二等に出てゐるが、何れも遊女の普賢菩薩の話は出てゐない。

やゝ時代は下るけれど、足利義滿が康應元年(一三八九)に嚴島記をした時の事を、今川貞世が記した、「鹿苑院殿嚴島詣記」の三月十二日のところに、

あひの浦すぎで、むろづみと云ふ所に至りぬ。むかし生身の文殊のみかほをがまむと誓ひける人に告げありて、これこそ生身の文殊よとて、此所の遊女を教へける所ぞかし。

といふ記事がある。これには性空上人とは記されてゐないし、普賢菩薩ではなくて文殊菩薩となつてはゐるが、性空上人の話と同話であると考へられる。ずつと後のものではあるが、備中岡山こがの古河辰がといふ人が、天明三年(一七八三)の九州旅行の見聞を記した「西遊雜記」といふ書がある。その四月廿三日から廿四日にかけての條に、

廿三日室積を一見せんとて在道に入る。宿なくして大いに屈し、稗田村といふ所のはにふの軒に夜をあかし、廿四日室積に至る。此浦は甚だ古き所にて、聖空上人の事跡、世に云ふ遊女普賢菩薩に化して聖空上人に對面せしと云ふ地にして、今に大黒屋惠比須屋と云ふ倡家残りて、聖空上人の時代よりもつゞきし家なりと土人の言傳へある事なり。

との記事がある。また尾張の商人菱屋平七が享和元年(一八〇一)の旅行記「筑紫紀行」の卷三、四月十二日の

條に

未ノ刻頃室積（上の關よ）に舟を着けて泊宿す。入海の湊にて其様體さまたよし、人家二百計。問屋遊女屋などもあり。されど賑ははしからず、町家も草葺の家多し。町の西なる濱邊に、峨眉山普賢寺とて、普賢菩薩を安置せる寺あり。日本にたゞ一體の本尊なりといふ。寺の庭に性空上人の石碑あり。性空は播磨の書寫山の開基の上人なり。かつて此所を通り給ふ事のありし時に、普賢菩薩遊女の形に化して上人に戯れ試み給ひけるに、上人の道德堅固におはしまして、御心動き給はざりしかば、其時御本相にかへり給ひて見えさせ給ひし其れを摸うつし傳へたる尊像なりとぞ寺の緣起にはいへる。

とある。これらをもこの室積の話も「古事談」にいふところと同一の話であつた事がわかる。「鹿苑院殿嚴島詣記」に文殊とあつたのは、文殊・普賢兩菩薩は常に釋迦如來像の兩脇侍として、左右一對に並び給うてゐるので、普賢をふと文殊と誤つたのであらうし、「筑紫紀行」に上人を試みる爲といふのは、時代を経るうちに變化したのもあらう。

さて以上記したところによると、同一の話が、神崎、室、室積と異つた場所について傳へられてゐることになる。こゝで、それらの地について考へてみる必要がおこつてくる。

神崎は、攝津國河邊郡にあつて、尼ヶ崎の東北、神崎川に臨む地で、大江匡房の「遊女記」に

到三攝津國、有三神崎蟹嶋等地、比レ門連レ戸、人家無レ絶、倡女成レ群、棹三扁舟二看三檢（旅ノ誤カ）船一、以薦二枕席、聲過二（過ノ誤カ）溪雲、韻飄二水風一、經廻之人、莫レ不レ忘レ家。

とあるやうに、古來交通の要津で遊女で有名な所である。ついでに、この蟹島は今の加島である。

室は今の室津で、播磨國樺保郡いんぼにあり、瀬戸内海に臨む港である。「本朝文粹」卷二の三善清行の「意見十二箇條」のうちの「一重請^レ修^レ復播國魚住泊^二事^一」の文中に

山陽西海南海^二道^一、舟船海行之程、自^二種生泊^一至^二韓泊^一一日行。

とあるやうに、これ亦古來瀬戸内海航行の要港であつた。種生泊は室原泊とも書き、今の室津の事である。また「撰集抄」第三の「播州竹岡、尼發心事」の條に、

昔播磨國竹の岡と云ふ所に、庵結びて行ふ尼侍り、本は室の遊女にて侍りけるが、みめさまなどもあしからざりけるにや、醍醐中納言顯基に被思奉りて、一年計の程都になん住渡り侍りけるが、如何成事か侍りけん、すさめられ奉りて、室に歸りて後、又も遊女の振舞などし侍らざりけるとかや。

とあるやうに、ここも亦遊女で有名な地であつた。

室積は周防國熊毛郡にあつて、古くから瀬戸内海航路の要港で、また遊女の居つたことは、前に引いた「鹿苑院殿嚴島詣記」其他によつても明らかであらう。

要之、神崎・室・室積三者ともに、船着場で遊女屋があつたといふ點で一致してゐる地である。性空上は播磨の書寫山の圓教寺の開山で、前述のやうに寛弘四年（一〇〇七）に寂した人である。書寫山は播磨國飾磨郡にあつて、姫路の西北一里半許の所である。室津は飾磨郡の西に隣る捐保郡いんぼの海岸にあつて、書寫山の西南五六里許の所であるから、位置としては此所が性空上人の住した書寫山に最も近いので、室の長者とといのが一番自然らしくも

思はれる。

室積は書寫山のある播磨國から西へ、備前・備中・備後・安藝と四ヶ國を隔てた最も遠距離の地ではあるけれど、長者の歌つた唄が「周防のみたらしの澤邊に」(撰集抄。御手洗みたらしは室積の一名)とか、「周防むろづみの中なる」(古事談、十訓抄)といはれてゐる點からみれば、室積だといふのも尤もである。性空上人は群書類従の傳部所收の「性空上人傳」に據れば、京の人で、母に従つて日向國に到り、三十六で出家して、霧島山に籠つて苦行し、更に背振山に移り、後、書寫山を開いたといふから、周防の室積を通つた筈である。だから書寫山から遠いといつて一概には退け難い。そしてそれは書寫山を聞くより以前の事であつたらうから、「筑紫紀行」にあるやうな、普賢菩薩が遊女と化して上人の道心を試みたといふやうな話にもなつたのであらう。

神崎は書寫山からは室津よりは遠いけれど、前に引いた大江匡房の「遊女紀」に

自_二山城國與渡津_一、浮_二巨川_一西行一日、謂_二之河陽_一、往_二返於山陽南海西海三道_一之者、莫_レ不_レ遵_二此路_一、江河南北、邑々處々、分流向_二河内國_一、謂_二之江口_一、蓋典藥寮味原樹(厨ノ誤カ)、掃部寮大庭庄也、到_二攝津國_一、有_二神崎蟹嶋等地_一。

とあるやうに、江口と並んで交通の要路であつたから、神崎の地へ性空上人がいつたとしても不思議はない筈である。そしてこの話の肝心な事は、普賢菩薩が遊女に化したといふ點にあるのだから、神崎でも室でも室積でも、遊女の居る地として有名であればいゝわけである。故に室積や室よりも京に近いだけに、京の人々によく知られてゐる神崎の地が撰ばれたものであらう。なほ一條兼良の著「東齋隨筆」佛法類にも、神崎の遊女として記

されてゐて、たゞ歌詞が「周防むろづみの中なるみさらゐ」にと少々異つてゐるだけである。

性空上人が何故に生身の普賢菩薩を拜みたいと祈念したかといふ事を考へてみると、「本朝法華驗記」「性空上人傳」「明匠略傳」等に據ると、上人は法華經の受持者である。そして「法華經」第七卷、「普賢菩薩勸發品第二十八」によれば、普賢菩薩は法華經の受持者を守護する菩薩であるからであらう。また普賢菩薩が遊女と化せられたといふ事は、「佛說觀普賢菩薩行法經」に據れば、菩薩の乗つてゐられる六牙の白象の六牙の端に六つの浴池があり、一ツ一ツの浴地の中に十四の蓮華を生じてゐる。一ツ一ツの華の上に一人の玉女があり、顔色紅輝天女に過ぎてゐる。手のなかに自然に五ツの空篋を化し、一ツ一ツの空篋に五百の樂器があつて眷屬とする。とある。この美女と樂器といふ事から遊女を連想してきたのではあるまいか。そのうへ、前に引いた大江匡房の「遊女記」に見える遊女の名のうちには、觀音、如意、香爐、孔雀、小觀音などといふ佛教に關係のあるものがある。これらの事も一つの原因となつたのであらうと思はれる。

この説話を資材とした文學作品に、中世の「硯破」がある。平出鏗二郎氏の「近古小説解題」によると、これは性空上人の生涯を綴つたもので、上人はもと左大臣時平の孫大納言朝時の青侍で中太三郎といつた。或時中太は朝時秘藏の硯を過つて破つた。中太が狼狽するので、朝時の若君が、自分が破つたといへば、父も宥すであらうかと罪を被つたが、朝時の怒は甚しく遂に若君の首を打落してしまつた。中太はこれを悲しみ、若君の菩提を弔ひ且は己の滅罪の爲にと出家して性空となり、書寫山を草創し、室の遊女に普賢を拜した事などが記されてゐるとの事である。硯を破つた事、室の遊女を見た事は「撰集抄」の六にのみ見えて、他の性空上人傳には見られ

ない事であるから、この小説は「撰集抄」を資料とした事は明らかである。

この他にも、性空人とは別の話ではあるが、「撰集抄」を資料とした作に、謡曲「江口」がある。その概略は、天王寺詣の旅僧が江口の里に着いて、西行の昔を思ひ、西行の「世の中を厭ふまでこそ」の歌を詠ずると、その時の遊女の靈が現れて、遊女等の川道遊の様を見せ、遂に普賢菩薩と現じ、乗つてゐた舟が白象となり、白雲に乗つて西の空に去つた。といふのである。これは「撰集抄」九にある「江口遊女成^レ尼事」の話、即ち、西行が江口で時雨に逢ひ、或家に晴間を待たうとしたが、主の遊女が許さなかつたので、西行が「世の中をいとふまでこそかたからめ假りの宿りを惜しむ君かな」と詠んだ時、主の遊女が、「世をいとふ人とし聞けば假りの宿に心とむなと思ふばかりぞ」と答へたのに興じて、一夜を其の家に語り明かした。後にこの遊女は尼となつた。といふ話であるが、それに、同じ「撰集抄」の性空上人の室の遊女の話をつ着けたものだと思はれる。こゝに江口の遊女が普賢菩薩と化したといふ新しい形の話が出来上つた。こゝに江口をもつてきたのは、西行の「世の中を」の歌が江口であつたから江口となつたまでで、もしこれが他の地、例へば蟹島の地でのことであつたならば、勿論蟹島の遊女となつたであらうけれど、江口といふのには、西行との關係ばかりでなく、他にも大きな理由が考へられる。それは、江口は攝津國西成郡（今は大阪市東淀川區）にあつて、淀川から神崎川の分れる分れ口のところにある。古來神崎と並んで遊女で有名な舟着場であつて、「江家次第」卷十五の八十島祭の條に、

捧^ニ御麻^ニ修^レ禊、禊^了以^ニ祭物^ニ投^レ海、次歸京、於^ニ江口^ニ遊女參入、纏頭例祿如^レ恒。

とある。八十島祭は大嘗會のあつた翌年行はれるもので、新たに御位に即き給うた天皇が、諸國の神々を祭り給

ふ儀式であるから、本来ならば各國々で行はるべきであらうが、それは繁多であるから、祭使が特に難波津に下つて、難波津に諸國を代表させて行はれるのである。その時に江口の遊女が参るのに纏頭を賜はることが例だといふのである。

例の「遊女記」に、

長保年中東三條院参詣住吉天王寺一 此時禪定大相國被籠二小觀音一。

とある。この東三條院は兼家（道長の父）の女の詮子、禪定大相國は道長であらう。「古事談」第二に

御堂（道長）召二遊女小觀音一 弟也、御出家之後、被レ参二七一大寺之時、歸洛經二河尻一、其間小觀音参入、入道

殿聞レ之頗頼面給、御衣被返二遣之一。

とある。「遊女記」に、「江口則觀音爲レ祖」とあるから、小觀音も江口の遊女であらう。「御堂關白記」に據ると、この東三條院の住吉・天王寺御参詣は、長保二年（一〇〇〇）三月廿日に京を御出發、同日石水御参詣、廿三日住吉と天王寺に御参詣、廿五日に御歸院となつてゐる。その廿五日の條には、

廿五日。壬寅。還院。子時、此遊女等被物給。米同レ之

とある。江口の遊女等が京まで御供してきたのであらう。

同じく「遊女記」に、東三條院の住吉天王寺詣の記事につづけて、

長元年中上東門院又有二御幸一。此時宇治大相國被賞二中君一。

とある。これは「榮華物語」の「殿上花見」の卷によると、長元四年（一〇三二）九月廿五日、京をおたちになつ

て、同日石清水、二十八日住吉・天王寺御參詣となつてゐる。その廿六日の條に、

江口といふ所になりて、あそびども、かさに月をいだし、螺鈿蒔繪、さまざまに、劣らじまけじとしてまゐりたり。聲ども、あしべうちよする浪の聲も、え口のいふべき方なくこそ見えしか。

とある。この上東門院は道長の女彰子、一條天皇の中宮であつた方、宇治大相國は道長の子頼通である。

同じく「榮華物語」の「松の下枝」の卷に、延久五年（一〇七三）二月二十日、後三條院が陽明門院、一品聰子内親王と御同行で、石清水・住吉・天王寺御幸の記事がある。その中に、

二十二日の辰の時ばかりに、御船出して下らせ給ふほどに、江口のあそび二船ばかり参りあひたり。祿などをぞたまはせける。物などはぬがせ給はず。經信の左大辨琵琶、權中將季宗笙、民部權大輔政長も笙、師賢の辨歌うたふ。笛の音も琵琶の音も、瀬々の河浪にまがひていみじくをかし。

とある。これらによつてみても、住吉天王寺詣は平安貴綰の間に屢々行はれてゐた事がわかる。そして京から住吉天王寺に赴くには船であるから、必ず江口を通り、江口の遊女がいつも参ることがわかる。しかもその時繪師のうちには江口の遊女を寵愛する者までがあつたとすれば、江口の名は京洛の人々には特に馴染の深いものがあらう。「古事談」には小野宮實頼が蟹島の遊女香爐を愛した話、二條帥長實と神崎の遊女目古曾との話などを戴せて居るから、神崎通ひも相當行はれたではあらうが、地理的にみて江口のやうに頻繁ではなかつたのであらう。室や室積にいたつては、安藝の嚴島詣とか、筑紫の太宰府行とかいふ時に通る地であるから、京洛の繪師にとつてこれらの地に行くことは可成り稀れな場合であつたらうが故に、到底江口のやうによく知られるといふわけに

はいかなかつたであらう。例の「遊女記」にも、

自_三京洛向_三河陽_二之時、愛_三江口人、刺史以下自_三西國_二入_レ河之輩、愛_三神崎人、皆以_三始見爲_レ事之故也。

とある。してみれば、江口は關白、大臣を客とする事もあるが、神崎は上客としては國守以上は稀れだといふ事になる。これは自然に江口と神崎との間にある差を生じたものではあるまいか。神崎がさうとすれば、もつと遠い室や室積は當然神崎より以下の品といふ事になるであらう。これが神崎等に代つて江口となつた所以であらう。

前述「撰集抄」の西行と江口の遊女との贈答の歌は、「新古今集」卷十、羈旅の部に

天王寺へまゐり侍りけるに、俄に雨降りければ、江口に宿をかりけるに、かし侍らざりければよみ侍りける。

西行法師

として出て居る。そして返しには「遊女妙」といふ名が出て居る。なほこの話は「沙石集」卷五の二十二「連歌の事」の條にも出て居る(しかしこれにはたゞ江口の長者とのみで「妙」といふ名は見えてゐない)から、この西行と江口の遊女との話は大いに世に流布せられたであらう。北村季吟の「新古今集抄」には、「遊女妙」に「砂石集等ニハ普賢菩薩化身云々」との註記があるほどである。

以上述べてきたやうに、最初は性空上人について語られた話ではあるが、謡曲「江口」によつて、西行となり江口となると、謡曲の普及と相待つて、近世の人々には、性空上人よりも殊に一般に馴染の深い西行に、耳遠い室積・室・神崎よりも聞馴れた江口にと話が變化して流布されてしまつたのであらう。かうなると、前述のやうに、性空上人であるから普賢菩薩と關係が深い、西行ではそれほど關係が密接ではなく、遊女としては返歌が

巧みであるのは只人ではない、果して菩薩の化身であつたといふぐらゐの浅い關係で、普賢菩薩でなければならぬ必然性は失はれてしまつたが、それは年數を経るにつれて、原話の精神は忘れられて、たゞ形だけに面影を傳へるのみとなつたからである。とにかく、江口と西行として話が變化してしまつたので、「攝津名所圖會」三には

江口遊女妙 歌塚とて新古今贈答の和歌を石刻して、江口村南提の上に建つる。北の方西行法師の歌、南の方遊女妙の歌。云々

君堂 江口里にあり。日蓮宗寶林山寂光寺普賢院と號す。女僧住職す。

江口君像 本堂に安ず。長一尺計、其外普賢菩薩の尊像、境内に西行塔、江口の君の墓、西行櫻あり。又什寶の西行眞蹟の和歌あり。

等の記事と共に、歌塚君堂の畫が載せてあるほどである。されば冒頭に掲げた川柳は、性空上人の時の事とすべきてなく、西行の時、江口の遊女の事と解すべきであらうと思ふ。ところでもた

大日は木綿普賢は緋縮緬

といふ川柳がある。「普賢は緋縮緬」は前述の遊女と化し給うたといふところから、その時の湯具は緋縮緬であらうといつたのであるが、「大日は木綿」もよく似た話で、しかも關係のある話であるからついでに。

これはお竹といふ善行の下婢が大日如來の化身であつたといふ話で、下婢であるから湯具は木綿だらうとの意であるが、この話の時代は大分新らしい。江戸芝赤羽の心光院の緣起を、「甲子夜話」卷五十九に載せて居る。

即ち、

昔一人の僧あり。羽州湯殿山に七日籠り、大日如來の尊容を拜さんと懇念しければ、夢に金塔あらはれ中に本尊ましまさず、但座光のみ存せり。今、人中に化現したまふ。汝未だしらずや、武州傳馬町佐久間氏が婢に、名は竹と云ふもの也。汝行きてすみやかに拜すべし、是肉身の如來なりと。夢覺めて彼の女を尋ぬるに果して凡庸ならず。朝夕に米洗ふ水板に細き布を張つて、したゝる飯をとり己が食とし、己が分をばことごとく乞食に施し、口に念佛怠る事なし。佐久間氏かの夢のよしを聞きて、敬養すること母のごとくなりければ、幾ほどもなくしていつくともなく遁れ去りけり。然るに其水板より時々光を放ちければ、佐久間須藤兩氏より當院に納め靈物となれり。此時當院は縁山の内道場にして、觀智國師の御代なり。桂昌院様にも上覽あらせられ袋篋御寄附なさせられ、永く當院の什寶と仰ぐものなり。東都縁嶽淨業別場心光院といふのである。そしてこの心光院にお竹の像があると「甲子夜話」には記してゐる。

「江戸名所圖會」卷之一、心光院の條、「竹女水盤」の項に、「新著聞集」に云ふとして、お竹の話のをせ、最期は「いづくともなく遁れ去りけり」でなく、「遂に大住生を遂げしとなり」となつてゐる。これの方が古い相であらう。

「兎園小説」の第三集に、山崎美成の「於竹大日如來縁起の辨」がある。これは安永六年（一七七七）四月に、出羽國羽黒山麓別當玄良坊から、江戸でお竹大日如來の開帳があつたときの玄良坊の縁起を引いて、美成が自分の考を述べたものである。その縁起の主旨は、前述「甲子夜話」所載の心光院の縁起とは少しく異つてゐる箇所

がある。その異つて居る重な點を記すと、

一 心光院のには、昔とのみであるが、玄良坊のには、文祿年中と年號がある。

二 心光院のには、武州傳馬町佐久間氏とのみあつて、佐久間氏の名は記されてゐないが、

玄良坊のには、傳馬町の名はないが、その代りに佐久間勘解由と名がある。

三 心光院のには、「昔一人の僧」とのみであるが、

玄良坊のには、「武藏國比企郡の湯殿嶺上戒行堅固の聖と」、大分悉しく記されてゐる。

四 心光院のには、お竹がいづくともなく去つただけであるが、

玄良坊のには、お竹の行方が知れないので、「常に起臥せし小房をひらき見れば、只靈香馥郁と薫じ、光明まさに眼裏にあるごときのみ」とある。

五 心光院のには、水盤が光を發した事があつて、お竹の像の事はない。

玄良坊のには、水盤發光の事はないが、勘解由がお竹の像を刻んで、湯殿山・月山・羽黒山の麓黄金堂に安置したとある。

この玄良坊の縁起に對する山崎美成の辨は左のやうなものである。

「文祿年中の比、武江佐久間何某召仕ふところの婢女に竹といふあり。」に對して、

「玉滴隱見」に云ふ。江戸大傳馬町の名主の佐久間善八といひける者の召仕なる竹と云ひける下女、去年三月廿一日に死したり。此竹こと、主の善八は間屋にて有りければ、大勢の者の食餌にかかづらひけれども、

聊も穀三寶を塵抹にせずして非人を憐み、其雜火の餘を以て牛馬を飼ひ抔して一生を送りしが、死して其儘、羽州湯殿山麓に金色の光り一度の内にあらはして、竹は中尊、娑婆にて主なりし佐久間は兩脇立と成りて今に有りと云々。此こと、彼御山の佐藤宮内と云ふ神人語之。また淺草新寺町獅子吼山善徳寺に、如意輪觀音の石塔あり。性岸妙智信女、延寶八庚申天五月十九日と彫刻したり。はお竹が墓なりと云ふ、此二條を併せ案するに、「玉滴隠見」、何れの年誰の撰と云ふこと詳ならねど、その書を閲するに、寛文ごろの事いと多く見えたれば、そのころのものとしらる。扱墓碑の延寶とあるに合へり。されどその月日の違へるを思ふに、墓碑の正しきは論ずべくものあらず。書に記したるは、遠き出羽の人の傳聞なれば、もとより聊の違ひはあるべきことなり。されば元祿ともいはんはさることなれども、文祿とするはいと謬なり。再びおもふに、かゝることいと近き世のことは懼りなきにあらず。その比、忌むところありて、しか記したるもしるべからざれば、強ひて咎むべきにあらずかし。

と辨じて居る。

「湯殿嶺上戒行堅固の聖あり。正身の大日如來を拜せんことを願ひ云々」に對しては

此一條は、書寫上人の生身の普賢を見奉るべきよしを祈請し給ひ、夢の告ありて、神崎の遊女を尋ね給ひし事（詳見三古事談僧行篇）を附會したるものと思はる。

とある。この辨の當否は玄良坊の縁起の文を見ないとわからないから、次に縁起の文をひいておく。

ある夜の夢に、汝生身の如來を拜せんとならば、武江佐久間氏何某の下女を拜せよとて夢覺めぬ。斯の如き

異夢二度に及びければ、疑ふことなく武城都下に尋ね來り、夢の告なるよしを語り、佐久間主人に物して、ひそかに竹女が面容を拜すれば、光明輝然として十方をてらし、尊貌紫磨の全（金ノ誤カ）身なりければ、主客ともに驚嘆不思議の感涙に咽び禮拜恭敬して、大悲難思の應用、未世の奇瑞心肝に徹して、ふかく渴仰の思をなせり。不思議なるかな、如來は隨處應度の悲願に酬いて、難化利益の機關を上人及び勘解由に見あらはされてや、咫尺の間、竹女が容、消然として去るところをしらず。人々驚愕し、悲慕搜索すれども跡を認むべきなし。

とある。

「勘解由に見あらはされ」に對しては、

佐久間氏は勘解由にあらず。「王滴隠見」に、善八と見えたり。

「事跡合考」を築ずるに、佐久間平八といふものは元祿後斷絶とぞ。菩提所増上寺中心光院佐久間下女

のながし板ありと見ゆ。佐久間氏の名、孰れか是なるをしらず。けだし合考の方、實に近からん。

しかはあれど、勘解由と記したるは、新著聞集に、佐久間勘解由と誤りしによりしものなるべし。

とある。ちと話が脇道に入るやうであるが、これによるとお竹の流しの事が「事蹟合考」にあるやうに解されるが、さうではない。何か他の書か、それとも心光院の縁起にでも見えるとの積りであらう。念のために「事蹟合考」を引いてみよう。卷の二に、「佐久間の事」として次のやうにある。

佐久間といふは、御入國以前より江戸下宿の間屋にて、代々大傳馬町に住する名主平八といふものにして、

かつて町年寄といふものにあらず。今はこの家斷絶なり。佐久間が住居は大傳馬町にてはこれなし。佐久間町今お玉が池といふ所すなはち住居の地なり。寺は僧上寺中心光院なり。

といふのである。これは増上寺の大鐘の記事の次にあるから、お竹大日如來の佐久間氏の事で、この時の主人が平八といふ名であつたといふのであらう。尤昔は代々同名を繼ぐ習であつたから、代々平八を名乗つたといふ意味かもしれない。たゞ「代々大傳馬町に住す名主平八」とありながら、後に「佐久間が住居は大傳馬町にてはこれなし云々」とあるのがわからない。どこかに脱文でもあるのであらうが、強ひて解すれば、代々大傳馬町に住んでゐるが、お竹の時代には佐久間町に住んでゐたとでもいふ意味であらうか。それとも、大傳馬町の方は商賣上の店で、住居が佐久間町であつたともいふ意味なのかもしれない。大傳馬町は神田川より南であり、佐久間町は神田川の北岸である。

話をもとに戻して、美成の辨は、つぎに「竹女が容消然として去るところをしらず」に對して、

是また妄誕なること辨をまたずしてしるものから、佛家にはかかる奇瑞をいふこと常なり。愚俗はあざむくべし。敢へて識者を誣ふべけんや。已にしるしたるがごとく、今墓碑現に存せり。且「玉滴隠見」に、死をしるし、「新著聞集」に、精進にして大往生をとげしと見えたるを併せおもふべし。

とある。

「勘解由、若干の貨財を抛ち、ありし面貌を尊像に彫刻し、羽州湯・月・羽黒三山靈場の麓に奉納し」に對して

「玉滴隱見」に、湯殿山麓に金色の光を顯したるよし見え、「新著聞集」に、近所のもの、湯殿山に詣で竹にあひたりといへるを謬り傳へしものならんか。於竹がこと、右二書より外に詳に且（ま）誕（ま）すべきものなし。さればこれをおきてもとづくべきなく、その他はみな妄誕なること論をまたず。

とある。以上で美成の辨は終つてゐる。

この山崎美成の説に私は讚成するものであるが、些か蛇足を加へてみるならば、先づ、お竹が大日如來の化身であつたといふことが、「古事談」の神崎の遊女の話に基づいてゐるといふ事は、「甲子夜話」にある縁起によれば、俄に同意出來かねるかもしれないが、玄良坊の縁起ならば、全く美成の言の通りで、比企郡の湯殿山の行者は性空上人、お竹は神崎の遊女にあたり、大日如來と現じて急に姿を消したのは、神崎の遊女が俄に死去したのと同趣であり、お竹の部屋に靈香馥郁としてゐたといふのは、「古事談」の「不可及三口外」ト謂畢、即逝去、于時異香滿空（イ室）云々といふのの形を稍異にただけである。神崎の遊女の時には普賢菩薩であつたのが、お竹の方では大日如來となつてゐるのは、山伏の最尊崇する不動明王は、大日如來憤怒の相の現れだとされてゐるからであらう。

玄良坊縁起に文祿の頃といふのは、寛文の頃とあるべきかと思はれる。美成が元祿かといふのは少し變である。淺草善徳寺の「性岸妙智信女、延寶八庚申天五月十九日」といふのが、果してお竹の墓かどうか、これには問題があらうが、美成はお竹の墓として意見を述べて居るから、それに従ふと、文祿は豊臣秀吉の頃で、文祿元年は西曆一五九二年、文祿五年（一五九六）十月に慶長元年と改元されてゐる。延寶八年は西曆一六八〇年である

から、文祿五年からでも八十四年隔つてゐる。文祿の頃既に下婢であつたお竹は、少くとも十七八歳にはなつて居たであらうから、一寸時代が古すぎる。寛文元年は西暦一六六一年で、寛文十三年（一六七八）が延寶元年となつてゐるから、寛文の頃に下婢として仕へてゐて、延寶八年に死んだといふのなら、お竹の日常の行爲からみて、寛文の頃既に相當の年配であつたのであらうから、話はあふ。そして「玉滴隠見」の去年をいつとみるかであるが、美成が「玉滴隠見」を、「寛文ごろの事いと多く見えたれば、そのころのものとしらる」といふのは、寛文延寶の頃に書かれたものとの意とし、「去年三月廿一日に死したり」の去年を延寶八年と解して、「墓碑の延寶とあるに合へり」といつたものであらう。しかし元祿となると、延寶九年（一六八一）が天和元年、天和四年（一六八四）が貞享元年、貞享五年（一六八八）が元祿元年であるから、死去したといふ延寶八年より以後の事となつて、「延寶八年五月十九日」といふ墓碑はお竹のではないとしてからでなければ話が合はない。因に「訂武江年表」には、寛永年間（元年一六二四—廿一年一六四四、正保と改元）の事とし、

佐久間の墓は、増上寺塔中の心光院にありしが、彼寺赤羽へうつりし頃にや、淺草の善徳寺へ引けたり。彼家の水盃は、今も心光院に收めてありとかや

と附記してゐる。

以上縷々記し來つたところによつて、お竹大日如來の奇瑞談の成立と展開の跡が大體推測されてくる。「玉滴隠見」「新著聞集」にあるところが最眞に近いものであらう。思ふにお竹といふ善行の下婢が居た事は事實であらう。そしてその評判は當時相當に高いものであつたのであらう。これをもとにして湯殿山麓の奇瑞談が出來上

つたのであらう。これを創り出したのが「玉滴隠見」にいふ佐藤宮内であつたか、それとも他に作者が居て佐藤宮内はたゞその宣傳掛であつたのかもしれないが、とにかく江戸から遠く離れた出羽の出来事だから、江戸の人には眞偽の判断はつき難い。これが湯殿山麓でお竹が中尊、主人佐久間氏夫妻が兩脇立となつた（玉滴隠見）とか、湯殿詣をした近所の人がお竹にあつた（新著聞集）とか、とにかく奇瑞は江戸から遠い羽黒山麓に限られてゐた理由であらう。時代が經つにつれて、湯殿山伏の夢告、佐久間邸での大日如來と示顯といふ玄良坊の縁起とまで發展し、安永六年四月江戸開帳となつたのであらう。しかしこれは縁起にいふやうな話が既に出來上つてゐたのか、それとも江戸開帳を企てゝから縁起を作つたか、その前後はこれだけの資料では何とも判別し難いが、前者とみるのが自然であらう。江戸開帳の安永六年（一七七七）は、お竹が死んだといふ延寶八年（一六八〇）からは九十七年後であるから、お竹の時代の人はもう江戸には生存してはゐないであらう。だから如何やうな不思議をお竹が江戸で示したとしても、反證をあげ得る者は居ない筈である。これがお竹の奇瑞が江戸にまで發展した理由であらう。この安永のお竹大日如來の像の江戸開帳は、「増訂武江年表」卷六に據れば愛宕山圓福寺であつたとの事である。

前記「甲子夜話」所引の赤羽心光院の縁起が、お竹を大日如來との夢告に、玄良坊のと異つた所傳のあるのは、以前からかういふ異傳があつたのか、或は玄良の縁起その儘では面白くないからといふので特に變へたのかもしれない。なほお竹の像が心光院にあるといふのは、或はこちらの方が古いのかもしれないが、玄良坊の開帳に刺激されて製作されたのぢやないかと邪推されるし、それとも玄良坊の開帳以後心光院に遺されたのかと

も思はれる。因みに山崎美成の「兎園小説」での辨は、文政八年（一八二五）乙酉三月、馬琴の家での集會の席上での事であり、「甲子夜話」は文政四年（一八二二）十一月甲子の夜から起稿し、正編百卷の成つたのは七年後の文政十一年（一八二八）だといはれてゐる。心光院で寶物扱にしてゐるお竹の水盤は、多分木製の流しであらうから、木が腐つてくれば、暗夜燐光を放つのはこれはいくらでもある事であらうが、その時代の人々はお竹の善行と思合せて不思議な奇瑞と驚いて評判したのであらう。馬琴の「羈旅漫録」巻上の廿三、「五綵の山水」の項に、三川新城（たかね）の深見氏の納戸の縁側の兩戸の節穴の手前一尺ばかりの所に紙をあてると、庭前の光景が逆さに五彩鮮やかに映ると驚嘆してゐる。幕末の博識家馬琴でさへさうである。まして延寶頃の江戸の庶民が、古流しが燐光を放つのを見たら、神佛の奇特と思ふのは當然なことであらう。されば、桂昌院の古流しの木片禮拜やそれを入れるべき袋箱の寄進なども事實であつたらう。この古流し放光が益、お竹非凡の評判を高め、遂に前記のやうなお竹大日如來の奇瑞談とまでになつたであらうかとも思はれる。「兎園小説」の山崎美成は流石に誕はされなかつたが、江戸一般庶民衆の信仰を誘ふには十分な力があつたらう事は推察に難くはない。

要之に、かやうな神佛の奇瑞談が一般民衆の教化に大きな力を現し得たのは、江戸末期から明治の初期頃まで、科學の智識の普及した時代となつては、その効果がないといふよりは寧ろ逆の効果となる。これが明治以來はかうした靈驗談が新たに發生しない理由であらう。しかしこれに類した事は現在には絶無だといふのではない。一般世人の心の奥には依前として何等かの奇蹟や冥加、それも自己にのみ物質的な幸福利益を齎すものを求めんとする心が潜んでゐる。これは現在の生活状態の不滿不安から來るものと思はれるが、所謂新興宗教は、か

うした人心の希求に應へんとするところに、その流行の根源があるかと思はれる。だから古い容相かたぢの靈驗奇瑞談はなくなつたであらうが、新しい容相の靈驗談は今日なほ盛んに語られてゐるのであらう。

—昭和三十一年九月二十日—

(本學教授 國文學)